魔法の世界でサイヤ人やってます

雪見ダイフク

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様に特典でサイヤ人にしてもらった男がＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬの世界に転生するお話。

「どうせなら知ってる世界にしてほしかったんだが？」

偏った浅い原作知識しか持たない彼の明日はどっちだ。

目次

プロローグ ―― 1
ギルド ―― 8
弟子入り ―― 15

プロローグ

皆さんは転生というものをご存知だろうか。

今やアニメやゲームに留まらず、ネットを漁れば直ぐに転生物の創作物は見つかる。色々と種類はあるだろうが、その中で一定数存在するのが神様転生と言うやつである。

何らかの理由で死んでしまった主人公が神様の手によって特典やら何やらを与えられ、異世界に転生するというのがテンプレであろうがこれを体験した俺から一言だけ言わせてもらいたい。

あのクソ神、今度会ったら絶対殴る。

さて、先程言った通り神様転生の被害?に会った俺だが、それ自体には不満は無かっ

たのだ。死んでしまった事はショックだったし、家族の事も頭を過ぎったが、直ぐにどうでもいいと思ってしまった。その辺は未練が残らないように思考を弄ってあったらしい。今思えばこの時点で怪しいがその時の俺は全く怪しまなかった。むしろ流石神様だとすんなり納得してしまったくらいだ。……もしかしてアレも思わされたんだろうか。

とにかく、真っ白な空間で特典を選ばされ、転生させられるというコテコテのテンプレ展開になった訳だが、この辺でもう少し詳しい話を聞いておけばよかったと後悔している。

特典は何がいいかと問われた俺は神に向かってこう答えた。

「サイヤ人にしてほしい」

自分でももっといい能力はいくらでもあったとは思うが、男なら一度は憧れる事だろう。かめはめ波とか撃ってみたい。

俺の願いは神にとっては容易い事だったらしく、あっさりと了承の返事をもらえた。

望み通りの特典を貰えて、じゃあ何が問題だったのか？

答えは単純である。

俺は今、自分の目の前にある建物。その看板に書かれた文字を見上げている。

"ＦＡＩＲＹＴＡＩＬ"

俺は前世で存在していたマンガ、アニメの世界に転生してしまったらしい。

ここまで聞いて、原作を知ってるなら原作の展開の改変なり、不遇キャラの救済なり、色々とやれて楽しそうだと思う人もいるかもしれない。

だが、それは原作を知っていればの話である。

"ＦＡＩＲＹＴＡＩＬ"という作品がかなり人気のある作品なのは知っている。

俺の友人にこの作品が好きな奴が居て、そいつに耳にタコが出来るぐらいにしつこく聞かされたから原作キャラの何人かの名前ぐらいは分かる。だが、内容は殆ど知らない。

手を出してみようかと思った時期もあったのだが、友人の『下手なエロマンガよりエロい少年漫画』という言葉を聞いて、俺は"ＦＡＩＲＹＴＡＩＬ"という作品はエロコメディ的なジャンルの作品だと思い込んでしまっていたのだ。

俺も男だし、そういうのが嫌いな訳では無いが、あまり露骨にお色気方面を押し出した作品は手を出しづらかったので、というか親や友達に見つかってからかわれるのが嫌だったので、結局読まないままだった。

結構広い層から人気があったみたいだし、今となっては多分勘違いだったのだろうなとは思うが、今更気づいてもどうしようもない。

あの神もどうせなら知っている世界に転生させてくれれば良かったものを。てっきり俺はありふれたファンタジーな、中世ヨーロッパ的な世界に飛ばされると思い込んでいたのだ。

漫画やアニメの世界がありならドラゴンボールの世界がよかった。生存率は絶望的だろうが、サイヤ人になったのなら希望はまだあっただろうし。

俺は何故か持っていた鏡で自分の顔を見る。……何で鏡があるんだろう。あれか、これで自分の容姿をきちんと確認してくださいね的な感じなのか？もっとフォローするべきところがあっただろ。他に何も持ってなかったんだぞ。つまり無一文だぞ。これからどないせいっちゅうねん。

鏡に映る俺はサイヤ人の特徴である黒髪黒目。前世基準で見れば寝癖で爆発したような髪型になっているが、サイヤ人ならこんなものか。地味に前髪がある事に安心し

た。ベジータみたいにＭ字ハゲになるのは嫌だからな。サイヤ人は頭髪が基本的に変化しないはずだし。

顔立ちもあまりキツい感じというよりは穏やかそうに見える。ベジータよりも悟空に近い感じだろうか？

ふと背中越しに腰の辺りを見てみれば、自分の体から生えている尻尾が確認出来た。

「おお、本当に尻尾がある！」

思わず尻尾を掴み、その瞬間、力が抜けてその場にへたり込む。

……そういえばサイヤ人って尻尾握られるとこうなるんだっけ。忘れてた。自分でこうなるとかアホかよ俺。

と、ここで自分の服装にも目が向いた。

「この服って……ＧＴで悟空が着てた道着か？」

水色の道着にオレンジのズボン。ピンクのリストバンド。ＧＴにおける悟空の服装で間違い無い。何でこのチョイス何だろう。山吹色の方じゃ駄目だったのか。不満がある訳ではないので別にいいけど、サービスする気があったのか無かったのかどっちなんだよ。

「それに……何か縮んでねーか？」

俺の身長は１８０ｃｍ程だったはずだが、どう見ても今の体はそんなにでかくない。

測らないと正確な事は言えないが、手足の長さから考えても明らかに子供になっている。

考える事が山積みで頭が痛くなりそうだが、とりあえず自分の事はこれぐらいにしてこの世界について考えよう。

この世界には魔法？というのがあったはず。実際にどういうものかは知らないが、世界観的にサイヤ人の近接、肉弾戦はどうなのだろう。

最悪遠距離からのエネルギー波とかだけで戦わなくちゃいけないんだろうか。いや、そもそもこの世界ってバトル物なのか？

主人公の名前は……あれ、何だっけ？

待て、落ち着いて考えよう。絶対に思い出せるはずだ。これぐらいも分からないようではただでさえ少ない知識が余計に信用出来なくなるではないか。

「つ……いや、な？……ツナ？って違う。これは別の作品だ。そうじゃなくて……」

「待て！ナツ!!」

「そうだ！ナツだ！って、え？」

思考の海から抜け出し、目の前に目を向ければ。そこにはもう目と鼻の先に迫った少年の姿。

咄嗟の事で避ける事も出来ず、鈍い音を立て額が衝突した。

これは――――戦闘民族の妖精の物語。

ギルド

「本当にすまなかった……。許してほしい」
「い、いや、別に大したこと無かったし……」
建物の中で手当を受けた俺。赤髪の少女が申し訳なさそうに頭を下げてくるが正直そこまでしてもらう程気にしてない。大して痛くも無かったし。転生してどうやら相当石頭になっているらしい。そんなとこまで強靭なのかサイヤ人。
というかぶつかって来た桜色の髪をした少年の方がダメージが大きそうでこちらが申し訳なくなる。
「んだよ！大体あんなとこに突っ立ってる方が悪いんじゃねえか」
「ナツ！」
「だっ!?」
文句を言った少年、ナツに拳骨を落とす少女。……このやり取りだけで彼らの力関係が察せられる。
痛みに呻くナツの姿を観察する。どことなく見覚えがあるような気もするし、彼が主人公のナツ・ドラ……ゴ……ドラコーン？だかなんだかいう人だろう。こうして見てい

る限りは普通の子供にしか見えないが、将来成長すればヒロインにラッキースケベをかますような立派なエロコメ主人公になるのだろうか。（なりません）

「お前が逃げたのが原因だろう。人の所為にせずに反省しろ」

「お……お……」

……かなり痛そうなんだけど彼は大丈夫なのだろうか。

「自己紹介がまだだったな。私はエルザ。こっちはナツ」

マジで？この子がエルザだったのか。彼女の事は知っているぞ。友人がしつこく聞かせて来たからな。確か裸で拷問されるシーンがあるキャラだろ？嬉々としてそのシーンについて語ってくる友人にドン引きしたのは記憶に新しい。こんな真面目そうな子が将来はそんなＳＭ地味たプレイをするようになるのかと思うと時の流れとは残酷だなと思う。

「俺は……」

それはともかくとして、俺も名乗ろうと思ったのだが、そういえば名前とか気にしてなかったな。

考えてみれば名前が無いなど不自然にも程がある。予め決めておけばよかった。早く応えないと怪しまれる。何か、何かそれっぽい名前……

「お、俺はリセロ」

咄嗟に出たにしてはサイヤ人っぽくていい名前ではなかろうか。この世界においておかしくないかは分からないがまあ多分大丈夫だろう。少なくとも前世の名前である田中太郎を名乗るよりはよっぽどいい。
「ふむ。リセロというのか。ギルドに何か用だったのか？」
「えっ？あ～……」
目の前に突っ立ってたんだからそう思われるわな。さて、何と答えたものか……。ん？いや、待て。今俺は無一文だし、このギルドというのがどういうものかは知らないが、見たところ子供も何人かいるみたいだし、俺も厄介になれないだろうか。少なくとも子供が一人で食い扶持を稼ごうとするよりは誰かの庇護下に置いてもらった方がいいだろう。
「俺、行く所無いんだ。迷惑じゃなかったら此処に居させてもらえないかな？」

結論から言うと俺の要望は受け入れられた。というか俺としては居候させてほしいというニュアンスだったのだが、エルザが人の話を聞かずにどんどん話を進めていき、

気づけばギルドに入る事になっていた。
俺ギルドがどういう所なのかも分かってないんだけど本当にいいんだろうか。
「気にするな。お前と同じような境遇の者も居る」
いや、同じような境遇って何？エルザさん？何か勘違いしてません？
流されるがままにギルドマークを刻み、俺はフェアリーテイルの一員になった。ちなみにマークの場所は左胸だ。どこに入れるか迷ったのだが、超サイヤ人４の胸にギルドマークがあったらカッコイイのではないかと妄想してしまい、衝動的に決めた。だが、多分そんな未来は来ないだろう。自分がそんなに強くなれる気はしないし、そんな変身が必要な戦いなどしたくない。

その後も慌ただしく一日が過ぎていった。いくつか挙げれば、何故か上半身裸の少年（グレイというらしい）に喧嘩を吹っかけられたりした。
どうやら俺がナツを頭突き一発でノックアウトしたと彼は認識したらしく、興味を持たれたようだ。俺としては面倒くさかったので無視しようと思ったのだが、あまりに人の話を聞かない為、望み通りに頭突きを食らわせて沈めておいた。自分の石頭ぶりにはびっくりである。
……ところで、友人の話ではグレイという名前の所構わず服を脱ぎ出す変態キャラ

がいたはずだが、こいつだろうか。まさかこの歳で露出性癖があるとは恐れ入った。
後はエルザとミラジェーンという子の喧嘩に巻き込まれたり。一部始終を見ていたというのに何故喧嘩をし始めるのか分からなかった。後ろではナツとグレイも殴り合っていたし、此処のコミュニケーション法か何かなのだろうか。だとしたら俺にはついていけそうにない。
それとミラジェーン……長いからミラでいいか。の口調がレディースのヤンキーみたいで怖い。露出の激しい格好してるし、将来が不安だ。
……友人からミラは裏でショタとか漁ってそう、とか聞いた事があるが目腐ってんのかあいつ。どこからどうやってそんな想像に至ったんだ。
それに比べてミラの兄妹達は素直だな。喧嘩を止めようとしてくれたエルフマンとリサーナが天使に見えたぜ。あれか、姉を反面教師にして育ったからいい子に……
おっとミラが凄い目で睨んで来ている。
えっ？何か失礼な事を考えなかったかって？ハハハッ、そんな訳がないだろう。だからその拳を収めるんだ。話せば分かｒ

いや、普通初対面の人間を殴るか。周りも慣れたものを見てるような態度だったが、暴力によるコミュニケーションが成り立ってるのかよ此処。毎日こんなんじゃないだろうな……。

最後に語るべきはマスターだろうか。見るからに問題児だらけのこのギルドのマスターということで、どんなゲテモノが出てくるかと身構えていたのだが、優しい爺さんで拍子抜けした。怒ったら怖かったりするんだろうか。少し話したが本当に性格の良さそうな人だ。年寄りは頑固で偏屈で面倒臭い存在だと思っていたが、考えが変わりそうである。

おっと、忘れちゃいけないのが飯の話だ。夕食もギルドでご馳走になったのだが、サイヤ人の胃袋を舐めていた。どれだけ食ってもまだ入る。我ながらどこに入っているのか不思議なくらい食った。

あまりの食欲に周りにドン引きされたが気にしない。美味いものを大量に食える。人間の三大欲求の一つをこれ以上ない程に満たせる。ああ、何て素晴らしいんだ。

……この一件で俺も変人のカテゴリで認識されたような気がしないでもないが、こ

れからはずっとこうなのだから慣れてもらうしかない。

まあ、何はともあれ皆歓迎……してくれてるかは分からんが、受け入れてはもらえそうで安心した。

この世界に転生した事に不満が無い訳ではないが、これからが楽しみでもある。

一先ずかめはめ波でも出す事を目標にしてみようか。サイヤ人になったからには強くなりたいし、修行のメニューも考えなくちゃな。

弟子入り

「頼む、エルザ・俺を弟子にしてくれ！」

俺は恥も外聞も投げ捨て、エルザに向かって頭を下げる。

この行動に至るまでに色々考えがあってのことなのだが、とりあえず順に話していこう。

俺がフェアリーテイルに加入してから約三ヶ月が経った。それだけの時間が過ぎれば流石にギルドの仕組みも理解したし、この世界についても分かってきた。

現在一番の悩みを挙げるとすればそれは――――

「弱い。弱過ぎる」

これに尽きる。

生活の地盤を整え、本格的にギルドでの活動を始める前に、自分の実力を把握する為にも、早速トレーニングを開始した。

サイヤ人の身体能力は流石のもので、明らかに幼い子供の体だというのに前世の俺を完全に上回っているだろう。

肉体の強度も高く、多少の衝撃なら全然へっちゃらだし、筋トレだっていつまででも続けていられる。前世では運動不足で、激しい運動の後は筋肉痛に悩まされたものだが、この体ではそれも苦にならない。

だが、その程度だ。俺が前世の自分よりも明らかに優れていると理解できる。それは逆に言えば、その程度で収まってしまっているということ。

まだ幼いからか、それともこの世界に合わせて何らかの補正のようなものでも働いているのか、サイヤ人の最下級戦士としてですら全く通用しそうにない身体能力。

ドラゴンボール原作開始時点の悟空と比べても劣っているのではなかろうか。少なくとも今の俺が銃弾を受けてピンピンしていられるとは思えない。

まあ、サイヤ人なのだから戦いの経験を積めばいずれ強くなれると思いたい。

自分の体のスペックを確認した俺は、とりあえずどれだけ戦えるかを確かめる必要があると考え、エルザに手合わせを申し込んだ。

別にエルザを選んだことに特別な理由は無い。強いて言えば、比較的普段からよく話すことと、同年代ということもあって頼みやすかっただけだ。

で、実際に手合わせした結果だが。

ボコボコにされた。

いや、別にエルザが俺を必要以上に痛めつけたとかでは無くて、単に俺とエルザでは実力に差があり過ぎて勝負にならなかった。

最初から勝てるとは思っていなかったが、想像以上に俺が弱かった。前世ではろくに喧嘩もしたことが無いし、何か武道を習っていた訳でもない。そんな奴がいきなり戦おうとしたのが間違いだった。つまるところ、いくら体のスペックが高くとも、それを動かす頭がついていけないのだ。

相手の動きも、攻撃も見えている。なのに、それに反応しきれない。体の大きさ、手足の長さが変わったことも相まって、相手との間合いが掴めきれず攻撃は当たらない。効率の良い体の動かし方も何も知らないから、一つ一つの動作が大袈裟になり空回って勝手に消耗する。

戦うとか言う以前の問題なのだ。

この間、ギルドのメンバーに付き添ってもらって依頼を受けたのだが、その途中で野良の魔導士との戦闘になった。俺は早々にやられて、足を引っ張っただけだった。

気にするなと慰められた。マスターからは初めてなのだから危険の少ない依頼を回すべきだったと謝られた。

でも、そうじゃない。

俺がもっと強ければ、自分が弱いことを本当に理解できていれば、足を引っ張ることなんてなかった。

それからは必死にトレーニングを重ねた。その甲斐あって多少は身体能力は高くなった……ような気がする。だけど、一人でいくら特訓しても限界がある。結局、戦いの勘なんてものは実戦でしか培えないものだ。

実はナツやグレイには喧嘩して勝っているのだが、あれは泥臭く殴り合って体のスペックのゴリ押しで勝っただけだ。あいつらがこのまま成長していけばすぐに勝てなくなるだろう。

一人では駄目なら誰かに頼るしかない。ならどうするかと考えた末に冒頭のシーンへと至る。

精神的には年下である少女に教えを乞うことに抵抗が無い訳ではなかったが、肉体年齢ではそう変わらないだろうし、何よりエルザは強い。

ギルドの同年代ではエルザ、ミラの二人は俺が知る限り頭一つ抜けている。後はラクサスも強いらしいが、あまり話したことがないし頼みにくい。ミラは初日に絡まれたのもあって少し苦手である。口調が攻撃的で怖いんだよな……。

同年代の奴に拘る必要もないのだが、明確に実力を知っているメンバーが少ないのも

あってエルザに頼むことにした。どうせ後の主要メンバーなのだろうし、接点は持っておいて損はないだろうしな。
「で、弟子に？私がお前を？」
「ああ、頼む。俺はもっと強くなりたいんだ」
「……いいだろう。だが、やるからには厳しくするぞ」
「!!ああ、ありがとうエルザ！」
突然の申し出で戸惑った様子のエルザだったが、俺の熱意が通じたのか、快く引き受けてくれた。
「では早速始めようか」
「へ？」
「お前に足りないのは経験だ。それを補うには実戦あるのみ！」
「ちょ、ちょっと待っ……」
「問答無用！」

「待たんかリセロ!!鍛錬の途中で逃げ出すとは何事だ!!」
「もう勘弁してくれよ?」
　現在俺はエルザから全力で逃げている。実戦でしか身につかないことがあるのは確かだろうが、それだけでは流石に体が持たない。それに実戦と言っても現状では一方的な戦いになるだけだ。あれから三時間程エルザと戦い続けたが、無駄に頑丈な体の所為で終わりが見えない。精神的にキツすぎる。自分から言い出しておいて速攻で逃げ出すとは情けないことこの上ないが、正直人選を間違えたと後悔している。
「はぁ……はぁ……な、何とか撒いたか?」
　どうにかエルザから逃げ切った俺は荒くなった息を深呼吸して整える。
　申し訳ないがエルザにはこの話はなかったことにしてもらおう。とてもエルザのスパルタ特訓についていける気がしない。
「今日はもう帰るか……」
　まだ夕方だが、どっと疲れた。帰って風呂入って寝よう……。

　尚、この後待ち伏せていたエルザに捕まり逃げたことに対して説教をされるのだっ

た。

「リセロ、お前エルザの弟子になったんだって？」
「もう広まってんのかよ……」
　翌日、ギルドに顔を出した俺にそう声を掛けてきたのはミラ。昨日の今日でもう周知の事実となっていることに辟易しつつ、返答する。
「で、それがどうかしたのか？」
「お前もあんな堅物女が師匠じゃ大変だろ？何なら私が変わりに鍛えてやろうか？弟子にあっさり師匠を鞍替えされて悔しがるエルザの顔が楽しみだ」
「ええ……」
　ミラの方からまさかの提案をされて驚いたが、続く台詞に今度は呆れた。エルザに対して嫌がらせがしたいだけじゃねぇかよ……。
「折角だけど遠慮しておくよ。エルザだけで間に合ってる」
　今日話し合ってやっぱり無しにしてもらうつもりだがな。とか思ってたらミラに胸

ぐらを掴まれ、引き寄せられる。
「エルザはよくて私は無理だってのか、ああ？」
「え、いやそういう訳では……」
　しまった。言葉選びを完全に間違った。エルザに対抗心を燃やすミラにあんな断り方をしたらこうなるのは目に見えているだろうに。
「リセロはもう来ているか？」
「エ、エルザ!?」
　このタイミングでエルザが来るのは非常に不味い気がするんだが……。
　するとニヤリと笑みを浮かべたミラが肩を組んできた。
「丁度いい時に来たな、エルザ。こいつは今から私の弟子だ。あんたはもういいってさ」
「ちょっ!?」
　何言い出すんだこいつ!?ミラの言葉を聞いたエルザが顔色を変える。
「リセロ、それは本当か？」
「い、いや……」
　ミラの弟子にはならないけど、エルザの弟子を辞めたいのも本音なのでどう言ったものか。
「リセロは私の弟子だ。勝手なことを言うなミラ」

「リセロだってあんたより私の方がいいって思ってるかもよ?」
何かどんどん話の流れが怪しくなって来たぞ……。つうか何で修羅場みたいになってんだ。
「「リセロ!!どっちがいい!?」
どっちも嫌です。とは言えなかった。

結局その後、エルザとミラが喧嘩を始め、俺はそれに巻き込まれ、いつの間にかナツやグレイも混ざった乱闘へと発展した。
俺は途中で意識を失ったのだが、目が覚めた時にはエルザとミラで一日おきに交互で師匠をするということで話が纏まっていた。
もうやっぱり無しで!とは言えない空気になってしまった。

何でこうなるんだ……。